

“The Evangelistic Beasts”における D. H. Lawrence の宇宙観

山 本 朝 世

(受付 2012 年 10 月 25 日)

は じ め に

詩集 *Birds, Beasts and Flowers* (1923) の中の一連の詩 “The Evangelistic Beasts” は、新約聖書の 4 人の福音伝道者の守護獣 (St Mark のライオン, St Luke の雄牛, St John の鷲。ただし St Mathew の場合は人である) をテーマとしている。この詩集は Lawrence が 1920 年から 1923 年にかけて地中海沿岸とアメリカ大陸を旅した際に見た果物や花などについての詩を収めている。よく指摘されるようにこれらの詩で Lawrence は、花や鳥などをそれら自身の生命的存在において、いわゆる「他者」として表現しようとした⁽¹⁾。“The Evangelistic Beasts” は、福音伝道者の守護獣をテーマとする点で趣を異にするが、これらの詩の Lawrence の意図は、福音伝道者の守護獣を古代の神話的宇宙的存在として復活させることであった。

“The Evangelistic Beasts” に付した「覚え書き」で Lawrence は次のように述べている。

OH PUT them back, put them back in the four corners of the heavens, where they belong, the Apocalyptic beasts. For with their wings full of stars they rule the night, and man that watches through the night lives four lives, and man that sleeps through the night sleeps four sleeps, the sleep of the lion, the sleep of the bull, the sleep of the man, and the eagle's sleep. After which the lion wakes, and it is day. Then from the four quarters the four winds blow, and life has its changes. But when the heavens are empty, empty of the four great Beasts, the four Natures, the four Winds, the four quarters, then sleep is empty too, man sleeps no more like the lion and the bull, nor wakes from the light-eyed eagle sleep.⁽²⁾

これらの ‘Apocalyptic beasts’ が星にみちた翼で夜を支配しながら、‘the four corners of the heavens’ にいる限り、人間も 4 つの獣の生を生きたり眠ったりすることができる。しかし、これらの獣たちは、福音伝道者の守護獣となることによって本来の居場所から奪われてしまった。それ以来天は宇宙的生命を失い、人間の眠りも空虚なものになった。覚え書では、これ

らの聖なる獣たちを本来の居場所である ‘the four corners of the heavens’ に戻せと呼びかける。

また Lawrence は、晩年のエッセイ *Apocalypse* (1931) でも聖書に隠された古代の神話的宇宙的世界を甦らせようとしたが、そこでも聖書のこれらの獣の6つの翼を持ち、内面は目にみちているなどという記述がいかに不自然かを批判している⁽³⁾。さらに *Apocalypse* の他の箇所でも Lawrence は、次のように述べている。

That the Jews managed, by pernicious anthropomorphizing, to turn the four great Creatures into Archangels, even with names like Michael and Gabriel, only shows the limit of the Jewish imagination, which can know nothing except in terms of the human ego.⁽⁴⁾

そこでキリスト教徒的想像力によって歪められたこれらの獣を本来の神話的生き物としての復活させようというのが、これらの詩の意図となる。しかし、各詩がそれに成功しているのか、あるいはその意図が表現されている内容の全てなのかは、別の問題である。

この詩集で Lawrence は、文明の観念的見方を排して、感覚的、直接的、肉体的イメージを用いて大地や地下の闇の世界に根ざす花や獣の生命的なあり方を表現しようとした。‘The Evangelistic Beasts’ の詩も、感覚的、肉体的イメージ、地上や地下への降下のイメージにみちている。それらによって詩を見ることは、Lawrence の思想に従って解釈することである。Sandra Gilbert は、この詩集の詩は ‘a process primarily of attention’ として見られるべきであり、思想的観念の押しつけによって見られるべきではないと興味深い指摘をしている⁽⁵⁾。しかし、他のところでは彼女は、この詩集の展開を詩人が地上あるいは地下の生命界に下り、甦るまでのプロセスを表現していると解釈し、‘The Evangelistic Beasts’ の詩もその一環をなすものと位置づけている⁽⁶⁾。

以下本論では、Lawrence の思想的立場からある程度自由になった時、詩が何を表わしているかという視点から各詩を解釈して行きたい。その結果これらの詩で重要なのは、精神と肉体、天上と地上などの対立ではなく、むしろ意識的自我と非人格的宇宙的生命の対立なのだということが明らかとなるだろう。

“St Matthew”

最初の詩 “St Matthew” は1923年4月に *Poetry* 誌、10月に *Adelphi* 誌に掲載され、後に *The Complete Poems* に収められた。*Birds, Beasts and Flowers* の中では後期の作といえる。

福音伝道者のうち St Mathew の表象だけが翼ある人間である。そして、この詩の注目すべき点は、肉体的生命を肯定する Lawrence の思想に一見矛盾して、精神（天上）と肉体（地上）の間を往復することが人間本来の生き方であることが示されていることである。

詩の語り手であるマタイは、いきなり第2連で ‘I, Mathew, am a man.’ と人間宣言を行う。彼はもはや聖人ではなく、ただの一人の人間にすぎないというわけである。次いで彼は、新約 John, XII, 32の十字架に架けられる前のイエスの言葉を引用する。

（以下同様に引用ページ数を示す。）

“And I, if I be lifted up, will draw all men unto me” — (p. 319)

しかし、天上ですべての人間を引き上げるキリストは、実は人間（男）になりきれていないとマタイは言う。

But then Jesus was not quite a man.
He was the Son of Man.
Filius Meus, O remorseless logic
Out of His own mouth. (p. 319)

キリストは、自ら ‘the Son of Man’ だと宣言し、そのため精神主義的な息子としての運命に縛られ大人になりきれなかった。それは ‘remorseless Logic’ だというのである。

マタイは、人間であるからそのような生き方をするつもりはない。

I, Matthew, being a man
Cannot be lifted up, the Paraclete
To draw all men unto me,
Seeing I am on a par with all men. (p. 320)

ここには ‘on a par with all men’ である一人の人間とし地上に留まろうとするマタイの決意がうかがえる。

ではマタイは地上に留まって人間らしく肉体の生命を生きるだけで足りるのかというと、そうではない。この点がこの詩の注目すべき点であって、6連でマタイは他の人間と同じように彼にもキリストの域に引き上げられることへの欲求もあることを認めるのである。

I, on the other hand,
Am drawn to the Uplifted, as all men are drawn,
To the Son of Man
Felix Meus. (p. 320)

ただしマタイにとって天上に引き上げられるについては条件がある。それは天上に引き上げられる途中でも、彼の心臓が鼓動し、‘the dark blood’ (p. 320) が揺れていることが認められることである。もし心臓が止まってしまったら、彼は ‘a soul in bliss, an angel, approximating to the Uplifted’ (p. 321) になるかもしれないが、彼は人間であるから、天使のようなものになるつもりはないと言う。

そして、10連ではそうならないうちに地上に下ろしてくれとキリストに懇願する。

Put me down again on the earth, Jesus, on the brown soil
Where flowers sprout in the acrid humus, and fade into humus again.
Where beasts drop their unlicked young, and pasture, and drop their droppings among
the turf.
Where the adder darts horizontal. (p. 321)

花や獣とともに腐敗と分解と毒のきわめて感覚的なイメージで、地上の生命界が描かれている。腐敗と毒のイメージをもった、しかし、それゆえに豊穡な土壌がゆえに、花や獣は生命の死と再生のサイクルを営むことができるのだ。およそ天上の永遠の精神界とは対照的な生命界の見事な表現である。‘the adder’ は ‘horizontal’ に走る。天上の精神への垂直指向とは対照的に、地上の生命の営みは大地を離れず水平を指向するからである。

しかし、かといって天上への欲求がなくなるわけではない。11連ではその欲求が一日の時間のサイクルのイメージとともに表現される。朝には ‘the wings of the morning’ (p. 321) を得て栄光ある主に向かって上昇するが、午後からやがて夕方になって花や動物の生命の営みが衰えてくると、自分も地上に降りるのだという。そして、夜になると海底への降下のイメージによって、闇への降下のクライマックスがくる。

And at evening I must leave off my wings of the spirit
As I leave off my braces,
And I must resume my nakedness like a fish, sinking down the dark reversion of night
Like a fish seeking the bottom, Jesus,

IXΘYΣ

…

Utterly beyond Thee, Dove of the Spirit;
Beyond everything, except itself. (pp. 320–322)

マタイは、‘wings’も‘braces’も捨て去った裸の魚となって海底の闇を下りながら、キリストに‘IXΘYΣ’（イクテュウス）と呼びかける。古代ローマ時代迫害を恐れた初期キリスト教徒たちは、地下にもぐり、魚の絵と‘IXΘYΣ’の字をもってキリストの表徴とした。ギリシャ語で「イエス・キリスト・神の子・救世主」の頭文字は、魚を意味した。またこの魚が生命の表徴でもあることはいうまでもない。キリスト教のイメージを逆手にとって肉体や「闇」の生命を強調する手法は、この詩集でくり返し見られるが、これもその典型である。真の魚であるのはキリストではなく、自分だと言わんばかりである。そして、マタイの魂は、下降してキリストやあらゆるものの彼方に達し、それ自身の存在‘itself’に至りつく。

これからも天上への上昇と地上への下降のイメージがくり返されるが、その跡を逐一たどる必要もないだろう。ただ印象的なのは、12, 13連の天上のキリストが‘the dregs of Terrestrial manhood’ (p. 322) を取り去ることができないため、人間が落ちて行くという描写である。人間は落ちながら溶解して熱い滴あるいは‘drops of blood’となり、次いで‘blood-veined wings’を得て、‘bats’ (p. 322) のように羽をひらめかせて落ちて行く。

They thread and thrill and flicker ever downward
To the dark zenith of Thine antipodes
Jesus Uplifted. (p. 322)

果てしない奈落を羽ばたきながら落ちて行き、‘Thine antipodes’に到達するという。
その後はどうなるのであろうか。

Afterwards, afterwards
Morning comes, and I shake the dews of night from the wings of my spirit
And mount like a lark, Beloved. (p. 322)

朝が来ると再び雲雀のように天に昇って行くという。この‘lark’は愛と精神の世界に向かって上昇する Shelley の雲雀のイメージである⁽⁷⁾。そして、このように上昇と下降をくり返すのが、人間の生き方だという。

I have been, and I have returned.
I have mounted up on the wings of the morning, and I have
 dredged down to the zenith's reversal.
Which is my way, being man.
Gods may stay in mid-heaven, the Son of Man has climbed to the Whitsun zenith.
But I, Matthew, being a man
Am a traveler back and forth.

So be it. (p. 323)

上昇と下降をくり返すのが、人間の運命だという。ただ 'the Whitsun zenith' に昇り詰めるキリストと並んで、'mid-heaven' に留まる 'Gods' のイメージが垣間見るように出てくる。この神々はキリストに対して異教的な神々なのであろう。この中空に留まる神々に、上昇と下降への欲求を統一した理想的なあり方が暗示されているように思われる。

Ross C. Murfin は、この詩に精神への上昇へのイメージがあることは認めながら、全体としては地上と闇への降下の方に重きがおかれているのは明らかだという⁽⁸⁾。また Horace Gregory はこの詩の上昇と下降の指向を認めながら、Lawrence のこの二つの世界を揺れ動く生き方はやがて行き詰まり、それが後期の *Pansies* (1929) の 'fury' となったのだという⁽⁹⁾。しかし、闇の生命への降下に重点をおきながらも精神への上昇の必要も認め、最終的に両者を統一したところに理想を見るところに Lawrence の思想的立場がよく表われている。

“St Mark”

しかし、次の “St Mark” と “St Luke” の翼あるライオンと雄牛は、天上と地上、精神と肉体を統一した生き方の表象といえる。それらは肯定されるべき理想といえるのだろうか。

聖マルコが生まれたのは、パレスチナの古代王国であるユダであり、ユダの表象はライオンであった。そのため聖マルコはライオンと結びつけられるようになった。伝統的なキリスト教では聖マルコの表象であるライオンは翼をもっている。そこで詩人は、そのライオンを 'The lion of the spirit.' と宣言する。

しかし、Lawrence によれば、もともとライオンは翼をもっていたわけではなく、本来居るべき地上で気ままに暮らしていた。そうしたライオンの生き方がまるでお伽話のように語られる。ライオンは 'voluptuousness' や 'blood' (p. 324) について考えながら、日向で横たわっていた。これはライオン地上的、肉体的な生命の怠惰な面を表している。'voluptuous-

ness’ や ‘blood’ だけでは、何か足りないのだ。これは Lawrence が肉体的生命を全面的に肯定していたわけではないことを示している。7連ではライオン自身が、味わうべきものをすべて味わい、眠りたいだけ眠ったあげく倦怠感に眉をひそめ始める。そして、そのようなライオンに精神の世界からの覚醒が訪れる。

まどろむ瞼の間から陽光が射し、光の尖塔に仔羊を見てライオンは驚く。彼の耳に ‘the silvery voice’ (p. 324) が聞こえてくる。仔羊は、もちろんキリストの表象であり、銀色は象徴的な色である。Psalm, XII, 6 には、‘the words of the Lord are as silver tried in a furnace of earth, purified seven times.’ とある。つまり「銀色の声」とは、神の声に他ならない。

“Guard my sheep,” came the silvery voice from the pinnacle,
“And I will give thee the wings of the morning.”
So the lion of the senses thought it was worth it. (p. 324)

こうしてライオンは、キリストの ‘my sheep’ の守護者としては ‘the wings of the morning’ を与えられ、天頂に引き上げられることになる。しかし、注意しなければならないのは、‘So the lion of the senses thought it was worth it.’ に表れたライオンの自意識的な態度と詩人の揶揄気味の口調である。

第12連では、‘dangerous propensities’ (p. 324) を持ったライオンが、天上の正義を揮うために嬉々として飛び回るさまが皮肉なユーモアをもって描かれる。

Ramping round, guarding the flock of mankind,
Sharpening his teeth on the wolves,
Ramping up through the air like a kestrel
And enjoying the sensation of heaven and righteousness and voluptuous wrath.
(p. 324)

天頂に引き上げられたライオンは、神のみ言葉を守らない者への怒りを感じながら、生き生きと飛び回っている。これは、ほとんどキリスト教の護教のライオンのパロディである。すでにライオンの自意識的な自己満足的が表れている。

13連でそうした傾向が一層明瞭になってくる。

There is a new sweetness in his voluptuously licking his paw
Now that it is a weapon of heaven. (p. 325)

‘voluptuousness’ は、今や自意識的な楽しみの対象となっている。こうしたライオンを Lawrence は、13 連で ‘He is well aware of himself’ と皮肉る。そして、‘...he...ceases to be a blood thirsty king of beasts...’ (p. 325) ということになってしまう。これは、地上的動物の生命の喪失でありライオンの墮落に他ならない。

やがて護教のライオンとして成功したライオンは、裕福で安穏なブルジョワ家庭が欲しくなる。ライオンの住み処は、本来なら暗い巣穴のはずなのに今や太陽の射し込む快適な ‘castle’ になってしまっている。さらにライオンは、‘a lioness, the she mate’ (p. 325) を得て裕福な一家の家長に納まってしまふ。

そして最終連では、ライオンは「盲目になった」‘Going blind’ (p. 325) と詩人はいう。盲目になるということは、ライオンがキリストの正義の守護者でありながら、自分の世界しか見えなくなっているということだ。天上への欲求と地上的生命への欲求を統一したライオンは、ほとんど理想的な生き方を体言しているように見える。しかし、そのためライオンは自意識的な自己満足に陥ってしまう。翼あるライオンの姿を借りて現代人の自己満足的な生き方が批判されているといえるだろう。

盲目となったライオンには、石像のイメージがあるが、詩人は、ベネチアのマニン広場の風雨に晒された聖マルコ像を見て盲目のイメージを広げたのかもしれない。

大熊昭信は、この盲目のイメージを次のように解明している。

普通、この翼あるライオンは、護教の存在である。じっさい、ベニスその他でみられるライオンの像は、(護教に励んだ結果からか)、「ついにめくらになっている」としている。これは石像のうつろな眼窩がさながら盲目のように見えるからである。だが、ここには揶揄よりもむしろテイレシアスのように盲目のゆえにすべてをみていることを暗示すると読みたい。そのとき「翼あるライオン」が、すべてを相対化するありようの寓意となるのである⁽¹⁰⁾。

しかし、この詩のライオンの皮肉な描写から、彼が真面目に「護教に励んだ結果から」盲目になったとは考えにくい。むしろ詩人は、ライオンの自己満足的な生き方をユーモアをもって皮肉り、最後に彼を盲目に陥れていると取るべきであろう。そして、このライオンは過去の遺物になっているのである。

“St Luke”

翼ある雄牛は聖ルカを象徴するとともに、犠牲の生け贄、またキリストの受難を表徴して

いる。旧約の雄牛は生け贄として捧げられる供え物として書かれているし、新約 Luke XVIII, 25 は、ザカリアの雄牛を奉納する話から語り始められている。キリストが全ての民の罪を負い、十字架に架けられて贖罪したことが、生け贄の雄牛のイメージと重ねられる。しかし、生け贄の雄牛は、一般的に「去勢牛」‘ox’を対象とする。一方「去勢されていない雄牛」‘bull’は、豊饒と多産あるいは暴力のイメージをもつ。“St Luke”は、去勢されていない‘bull’について詠われており、聖書的な意味に対置されて豊饒な生命力と闘う意志に充ちている。1連はそのような雄牛の描写から始まる。

A wall, a bastion,
A living forehead with its slow whorl of hair
And a bull's large, somber, glancing eye
And glistening, adhesive muzzle
With cavernous nostrils where the winds run hot
Snorting defiance
Or greedily snuffling behind the cows. (p. 325)

Geoffrey Grison は、Lawrence はここで雄牛を描くというよりもその‘actuality’を提示しているのだと言っているが、その通りである⁽¹¹⁾。この野生の本能的生命にみちた恐るべき雄牛は、あらゆる意味でキリスト教の護教の雄牛の対極にある。

2連では‘the golden horns of power’である角が強調される。それは、‘power to kill, power to create’をもち、‘Moses’や‘God’の角のようなものだという (p. 326)。キリストに批判的な Lawrence にとって、旧約のモーゼや父なる神は非人格的、超越的な力と権威の表徴としての意味をもつことがあった。またこの角に「豊饒の角」また男根のイメージがあることは明らかである。さらに注目すべきことは、Lawrence がモーゼや神の角を‘head-power’ (p. 326) と形容していることである。‘head’といえは知性や精神の中核として Lawrence によって批判されてもよさそうなものだが、この‘head-power’の語は、非人格的生命力の発露として明らかに肯定的イメージをもっている。

3連で詩人は、このような雄牛の肩から翼が‘Assyrian-wise’ (p. 326) に炎のように噴き出しても不思議ではないだろうという。そしてさらに4連でそのイメージが具象化される。

Knowing the thunder of his heart,
The massive thunder of his dew-lapped chest
Deep and reverberating,

It would be no wonder if great wings, like flame, fanned out
from the furnace-crack of his shoulder-sockets. (p. 326)

心臓は深く轟く雷のように鼓動し、胸は白熱した溶鉱炉のように燃え盛っている。だとすれば肩の関節窩から炎のように大きな翼が噴き出ても不思議ではないだろうという。何とも激しい生命的イメージであるが、このようにして翼を得る生命にみちた雄牛こそ、天上への上昇と地上への降下を統一した理想的なあり方の表徴といえるかもしれない。

さらに 4 連ではこの溶鉱炉のように燃え盛る生命が、凄まじいイメージをもって表現される。そのいかにも Lawrence 的な表現の迫力は圧倒的だが、しかし、早くもその生命が雄牛自身にとって重荷になってくる。‘the urge, the massive, burning ache of the bull’s breast’ が生まれ始め、それは大きな唸りを上げて燃え盛る溶鉱炉から滴り落ちる ‘ache’ (p. 326) なのだという。これは雄牛なりのいわゆる胸の痛みなのであり、彼が自らの呵責ない生命に耐えかねて、他の何かを求め始めたことを意味している。そして、5 連と 6 連で詩人は、‘For what does he ache, and groan?’ ‘Is his breast a wall?’ (p. 326) と問う。雄牛の胸は、愛を求めるよりも闘うための城壁ではなかったのか、というわけである。7 連でその問いの解答が与えられる。

Nay, once it was also a fortress wall, and the weight of a vast battery.
But now it is a burning hearthstone only,
Massive old altar of his own burnt offering. (p. 326)

キリストに仕え始めてから、あふれるばかりの生命を抱える雄牛の胸は、自らを生け贄として捧げる ‘massive old altar’ となってしまった。しかし、雄牛の自己犠牲はキリストの愛の精神による自己犠牲とはいささか趣きが違う。雄牛は、犠牲の行為として彼の ‘herd’ を産み育てるために ‘his own black blood’ を ‘a sheet of flame’ (p. 326) のように注ぎかけるのだという。雄牛は、“St Mark” のライオンのように羊の群れを守る羊飼いはなれない。雄牛は同朋が増え栄えるように彼の生命力を犠牲として捧げるのである。

とはいえ 9 連で雄牛の胸は世界に向かって闘いを挑む ‘fiery fortress’ のイメージを一時的に回復する。しかし、彼は神の子羊 ‘the Lamb’ が ‘red-struck flag’ に魅了されてしまう。それ以来彼の ‘fortress’ のごとき巨大な胸は解体され、‘fires of wrath’ は消され、‘horn’ は ‘enemy’ から向きを変えたと詩人は言う (p. 327)。*‘enemy’* とは、‘red-struck flag’ つまり「聖ジョージ十字軍の旗」を振りかざすイギリス国教会であることに、疑いはない。

12 連で今や ‘the Son of Man’ に仕え、その鳴き声も ‘hollow’ になった雄牛が描写される。

しかし、雄牛は彼の生命力を全く失ってしまったわけではない。Lawrence によれば、むしろ雄牛は狭い自己犠牲の道を通じて持て余すほどの生命力を注ぎ込むことを強いられているだけなのだ。そのため2000年の間 ‘Luke, the Bull, the father of substance, the Providence Bull’ であり続けた雄牛は、今やせき止められた ‘his own massive black blood’ (p. 327) の圧力があふれんばかりになっていると詩人は言う。

そこで13連で Lawrence は、雄牛に世界への闘いをけしかける。雄牛に ‘his horns’ を思い出し、彼の額を ‘bastion’ として立て直し、何もかも顧みることなく、 ‘a mighty catapult’ のように ‘the red-cross flag’ を攻めよという (p. 327)。再び闘いの雄牛となって世界の破壊に身を捧げよというわけである。現代という時代の破壊への Lawrence の願望が表れている。

しかし、現代にこのような猛々しい雄牛の復活は可能であろうか？そこで問題となるのが、最終連の解釈である。

And so it is war.

The bull of the proletariat has got his head down. (p. 327)

この表現について M. J. Lockwood は、次のように述べている。 ‘...a conflict is promised that will overthrow the well-to-do bourgeois world of The guardians of Christ’s flock, though the motivation is hardly political...’⁽¹²⁾ しかし、Lawrence の社会主義嫌いは、彼の小説やエッセイから明らかであり、この詩集の詩 “Hibiscus and Salvia Flowers” でも Lawrence は、シシリー島で労働者たちがハイビスカスの赤い花を胸に挿して行進するのを見て痛烈に弾劾している。その Lawrence がここでにわかに社会主義革命を肯定するとは考えにくい。むしろ現代という時代には破壊の雄牛としてはもはや社会主義者くらいしかないといういささか皮肉めいたアンチクライマックスによって、最後にこの詩での自らの過剰な雄牛の神話化、象徴化を相対化していると見るべきであろう。

“St John”

“The Evangelistic Beasts” の最後を飾るのは、“St John” である。ヨハネは、福音伝道者のなかで最も瞑想的といわれ、「イエスが最も愛した弟子」と伝えられている。最後にエーゲ海のパトモス島に流刑となり、そこで『ヨハネの黙示録』を書いた。先に述べたように、Lawrence は『ヨハネの黙示録』に強く反発していた。しかし、彼は、この詩において聖ヨハネを彼の表象である鷲とともにキリストをも上回る全知全能の精神として甦らせようとしている。

1 連で詩人は、ヨハネに ‘Thou honourable bird, / Sun-peering eagle’ と呼びかける。2 連で鷲であるヨハネは、高く飛ぶ鷲の鳥瞰的な視野をもち、キリストの磔刑と復活さえ彼の見下ろす眼下の人間界の出来事として片付けられてしまう。

Taking a bird's eye view
Even of Calvary and Ressionation
Not to speak of Babylon's whoredom.
High over the mild effulgence of the dove
Hung all the time, did we but know it, the all-knowing shadow
Of John's great gold-barred eagle. (p. 328)

われわれが知りさえすれば、鳩であるキリストのはるか上をヨハネの大きな全知の金縷の鷲が浮かんでいるのが見えるという。ヨハネの全知の精神は、キリストに先立って天地の開闢を知っており、その精神にとってはキリストの事績や言葉でさえ既知の出来事にすぎない。5 連では『ヨハネによる福音書』第一章一節の有名な文が引用される。

“In the beginning was the Word
And the Word was God
And the Word was with God”

Having been to school
John knew the whole proposition.
As for innocent Jesus
He was one of Nature's phenomena, no doubt. (p. 328)

いささか軽口めいた口調で、一見聖書の有名な言葉を揶揄しているように見える。Lawrence は、学校教育に批判的であったし、“Snake” の詩では蛇を殺せという ‘the voice of my education’ が批判されている⁽¹³⁾。また Lawrence が ‘Foreword to *Sons and Lovers*’ では、ヨハネの言葉 ‘The Word was made Flesh.’ を書き換えて ‘The Flesh was made Word.’ とすべきだと主張したのは周知の事実である⁽¹⁴⁾。そのためここで Lawrence は、福音書のヨハネの言葉を否定しているのだと解釈されがちかもしれない。しかし、ここで Lawrence が揶揄しているのは、ヨハネにとっては当たり前の ‘the whole proposition’ をキリストがことさらに言ったことなのであって、‘In the beginning was the Word.’ という言葉の内容そのものではない。なぜな

ら次の8, 9連に見られるように, Lawrence は天地の開闢時にヨハネのような全てを定める ‘a great Mind’ と ‘the Logos’ があつたことを認めているからである。肉体的生命の復活を主張する Lawrence は, この詩においては全能の精神を肯定している。ここで重要なのは, 精神と肉体の対立ではなく, 精神が非人格的で宇宙的な生命に属するか, キリストのように人間的で人格的な意識に属するかということなのだ。全知全能の精神をもったヨハネから見れば, 今更 ‘the whole proposition’ を問題にする ‘innocent Jesus’ など, 眼下の ‘one of Nature’s phenomena’ に過ぎないというわけである。

8, 9連で上のヨハネの言葉と全知の精神が改めて肯定される。

The Logos, the Logos!

“In the beginning was the Word.”

Is there not a great Mind pre-ordaining?

Does not a supreme Intellect ideally procreate the Universe?

Is not each soul a vivid thought in the great consciousness stream of God? (p. 328)

疑問文の反復による反語的な主張によってではあるが, これは実質的に全てを創造する旧約の全能の神の肯定である。

さらに11, 12連で ‘the cycles of creation’ を創造しながら, 天空を飛翔する ‘Proud intellect, high-soaring Mind’ への賛美が続く。このようなヨハネの大いなる精神に比べれば, イエスなど ‘the lower boughs of sufferance’ でクークー鳴く ‘pale and lambent dove’ (p. 329) に過ぎないと言う。しかし, この誇り高い ‘high soaring Mind’ の飛翔は, 長くは続かない。それを下から見上げるキリスト教徒たちのねたみが始まる。‘Shoo it down out of the empyrean / Of the all-seeing, all-fore-ordaining ideal.’ と彼らは叫ぶ。‘Make it roost on bird-spattered, rocky Patmos / And let it moult there, among the stones of the bitter sea.’ (p. 329) こうしてヨハネの鷺は, 岩だらけのバトモス島に追放されてしまう。およそ天空を誇り高く飛翔するのとは対照的な, 荒涼たる地上のイメージである。

また15連で ‘dung-whitened Patmos’ で尾羽打ち枯らした ‘the almighty eagle’ の様子が描かれる。見る影もない哀れな鷺の姿である。それを見て詩人はいう。どうやら老いた鳥は疲れてしまい, 今や新しいヒヨコが ‘the extensive shell of the mundane egg’ (p. 329) を破ってくれるのを待っているようだ。そして, 16連で老いて歴史的使命を果たしたヨハネの鷺は, 滅びなければならぬことが示される。

The Poor old golden eagle of the word-fledged spirit
Moulting and moping and waiting, willing at last
Fore the fire to burn it up, feathers and all,
So that a new conception of the beginning and end
Can rise from the ashes.

新たな時代の ‘a new conception of the beginning and end’ は、新たなヒヨコに託されなければならない。そのためヨハネの ‘the Poor old golden eagle’ は、自ら燃えて灰にならなければならない。最終連は、‘Phoenix’ となったヨハネの鷲が燃え、‘a blue, wan fledgeling’ (p. 330) となって甦る描写に捧げられている。この鳥がヨハネの精神の甦りなのかどうかを問うのはあまり意味がないだろう。いずれにしてもそれは全く新しいヒヨコでなければならないのだ。

お わ り に

こうしてみると Lawrence は、‘Evangelistic Beasts’ の 4 編の詩で福音伝道者の表象である人と獣をキリスト教の支配から救い出したように見えても、結局それらを ‘the four corners of heaven’ に戻して、‘a new conception of the beginning and end’ とするわけにはいかなかったようだ。それらの神話的人也獣もそれらを支配したキリスト教も歴史的使命を終えているのであり、新しい時代の復活は未知の ‘Phoenix’ に託さざるをえないからである。

Notes

- (1) Cf. Marshall, Tom, *Psychic Mariner: A Reading of the Poems of D. H. Lawrence*. London: Heinemann, 1970, p. 116. Sagar, Keith, *D. H. Lawrence: Life into Art*. Athens: The Univ. of Georgia Pr., 1985, p. 214. Laird, Holly A, *Self and Sequence: the Poetry of D. H. Lawrence*, Charlottesville: The Univ. of Virginia Pr., 1988, p. 66.
- (2) Pinto, Vivian de Sola and Roberts, Warren eds. *The Complete Poems of D. H. Lawrence*. London: Penguin, 1994, p. 319. 本論ではこの版をテキストとして用いた。以下引用文末尾に引用ページ数を示す。
- (3) Lawrence, D. H., *Apocalypse*. ed. Kalnins, Mara, Cambridge: Cambridge UP. ed. 1980, p. 61.
- (4) *Ibid.*, p. 83.
- (5) Gilbert, Sandra M., *Acts of Attention: The Poems of D. H. Lawrence*, Carbondale and Edwardsville: Southern Illinois University Press, 1980. pp. 6-7.
- (6) Gilbert, Sandra M., “Hell on Earth: *Birds, Beasts and Flowers as Subversive Narrative*”, *The D. H. Lawrence Review* 12 (Fall 1979), Newark, Delaware: Arkansas UP, 1974. p. 259.
- (7) Lawrence の詩全般およびこの箇所の Shelley の雲雀のイメージについては、Cf. Murfin, Ross C., *The Poetry of D. H. Lawrence: Texts & Contexts*, Lincoln & London: The Univ. of Nebraska Pr., 1983,

- pp. 44–59.
- (8) Cf. op. cit., pp. 58–59.
 - (9) Cf. Gregory, Horace, *Pilgrim of the Apocalypse: A Critical Study of D. H. Lawrence*, New York: The Viking Pr., 1933, p. 106.
 - (10) 大熊昭信 『D. H. ロレンスの文学人類学的考察—性愛の神秘主義, ポストコロニアリズム, 単独者をめぐって—』 風間書房, 2009, p. 99.
 - (11) Grison, Geoffrey, ‘The Poet in D. H. Lawrence’, ed. Banerjee, A., *D. H. Lawrence’s Poetry: Demon Liberated; A Collection of Primary and Secondary Material*, London: Macmillan, 1990, pp. 142–143, (Originally published in *London Magazine*, May 1958)
 - (12) Lockwood, M. J., *A Study of The Poems of D. H. Lawrence Thinking in Poetry*, London: Palgrave, 2002. p. 120.
 - (13) *Birds, Beasts and Flowers*, op. cit., p. 351.
 - (14) Cf. ‘Foreword to *Sons and Lovers*’, Appendix I to the Cambridge edition of *Sons and Lovers*, eds. Helen Baron and Carl Baron, Cambridge: Cambridge UP., 1992, pp. 467–473.

引用文献

- Lawrence, D. H., Pinto, Vivian de Sola and Roberts, Warren eds. *The Complete Poems of D. H. Lawrence*. London: Penguin, 1994.
- Lawrence, D. H., *Apocalypse*. ed. Kalnins, Mara, Cambridge: Cambridge UP. ed. 1980.
- Lawrence, D. H., *Twilight in Italy*. Harmondsworth: Penguin Books, 1960.
- Lawrence, D. H., ‘Foreword to *Sons and Lovers*’, Appendix I to the Cambridge edition of *Sons and Lovers*, eds. Helen Baron and Carl Baron, Cambridge: Cambridge UP., 1992.
- Gilbert, Sandra M., *Acts of Attention: The Poems of D. H. Lawrence*, Southern Illinois University Press, 1980.
- Gilbert, Sandra M., “Hell on Earth: *Birds, Beasts and Flowers* as Subversive Narrative”, *The D. H. Lawrence Review* 12 (Fall 1979): Arkansas UP, 1974.
- Grison, Geoffrey, ‘The Poet in D. H. Lawrence’, ed. Banerjee, A., *D. H. Lawrence’s Poetry: Demon Liberated; A Collection of Primary and Secondary Material*, London: Macmillan, 1990.
- Gregory, Horace, *Pilgrim of the Apocalypse: A Critical Study of D. H. Lawrence*, New York: The Viking Pr., 1933.
- Laird, Holly A, *Self and Sequence: the Poetry of D. H. Lawrence*, Charlottesville: The Univ. of Virginia Pr., 1988.
- Lockwood, M. J., *A Study of The Poems of D. H. Lawrence Thinking in Poetry*, London: Palgrave, 2002.
- Marshall, Tom, *Psychic Mariner: A Reading of the Poems of D. H. Lawrence*. London: Heinemann, 1970.
- Murfin, Ross C., *The Poetry of D. H. Lawrence: Texts & Contexts*, Lincoln & London: The Univ. of Nebraska Pr., 1983.
- Sagar, Keith, *D. H. Lawrence: Life into Art*. Athens: The Univ. of Georgia Pr., 1985.

Summary

The Cosmic View in ‘Evangelistic Beasts’ of *Birds, Beasts, and Flowers* by D. H. Lawrence

Tokiyo Yamamoto

In the poems in “The Evangelistic Beasts” in *Birds, Beasts and Flowers*, D. H. Lawrence intended to release the Apocalyptic beasts from the Christian faith and ‘to put them back to the four corners of heavens’ as in the ancient cosmic myth. It seems justifiable, therefore, to see these poems as another manifestation of Lawrence’s criticism of Christianity and his faith in the ‘dark’ life of the earth. In “St Matthew”, however, Matthew’s wish to ascend to heaven is affirmed as a natural human urge, and in “St John” ‘that mind-soaring eagle of an Evangelist’ is acclaimed as ‘a king eagle...sweeping the round of heaven / And casting the cycles of creation.’ These positive expressions are apparently contradictory to Lawrence’s faith in the ‘dark’ life of body and earth. It makes us believe that those poems should be read through the dualistic imagery of personal mental consciousness and impersonal cosmic consciousness, rather than through those of spirit and body, heaven and earth, light and darkness, etc. One final critical point to be argued should be whether Lawrence succeeded in putting the beasts ‘back to the four corners of heavens.’